

私立大学経常費補助金「私立大学教育研究高度化推進特別補助」  
教育・学習方法等の改善事業

学生参加による循環型授業評価・授業改善システムの構築

平成 18・19 年度 活動報告書（中間）

代表 本田 多美枝

平成 20 (2008) 年 3 月

## 目次

I. はじめに .....	1
II. 事業の概要 .....	3
III. 平成 18 年度の活動内容および成果 .....	5
1. 授業評価システムに関する他大学の取り組み成果についての調査	5
2. 本学の学生および教員を対象とした「授業評価に関する質問紙調査」	12
2-1. 学生を対象とした調査	
2-2. 教員を対象とした調査	
3. 「看護系大学の使命 FD 活動の座標軸」日本看護系大学協議会 FD 委員会研修への参加	20
IV. 平成 19 年度の活動内容および成果 .....	21
1. 講義版・演習版授業評価フォーム作成の取り組み	21
1-1. 現行授業評価フォームの改善点と講義版・演習版授業評価フォームの作成	
1-2. 教員を対象とした「講義版・演習版授業評価フォームに関する調査」	
1-3. 学生を対象とした「講義版・演習版授業評価フォームの試行」と「質問紙調査」	
1-4. 講義版・演習版授業評価フォームの修正と今後の課題	
2. 実習版授業評価フォーム作成の取り組み	25
2-1. 実習版授業評価フォームの作成	
2-2. 本学の教員を対象とした「実習版授業評価フォームに関する調査」	
2-3. 本学の学生を対象とした「実習版授業評価フォームの試行」と「質問紙調査」	
2-4. 実習版授業評価フォームの修正と今後の課題	
3. コンピュータシステムによる授業評価の仕様および試行	30
V. 平成 20 年度の活動計画 .....	34

## 資料

1. 「授業についてのアンケート」用紙
2. 現行授業評価の実施方法
3. 「授業についてのアンケート」に関する調査用紙（学生用）
4. 「授業についてのアンケート」に関する調査用紙（教員用）
5. 講義版、演習版、実習版授業評価フォームに関する調査用紙（教員用）
6. 講義版、演習版授業評価フォームに関する調査用紙（学生用）
7. 実習版授業評価フォームに関する調査用紙（学生用）
8. 講義版授業評価フォーム
9. 演習版授業評価フォーム
10. 実習版授業評価フォーム（案）
11. 実習版授業評価フォーム（完成版）
12. 「授業についてのアンケート」パソコン入力システムに関する調査（学生用）

## I. はじめに

授業評価は、教育活動の Quality Management（質管理）の一つの方略として位置づくものである。わが国において、授業評価を行う大学が急増した背景には、1991年の大学設置基準の大綱化とあわせて、大学の自己点検・評価の実施が求められ、その中で「教員の教育活動に対する工夫（学生による授業評価等）」があげられたことと関係している。さらに、1998年10月の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性が輝く大学－」の中で、教員の教育活動評価と授業改善についてさらに踏み込んだ提言が行われた。これらを受け、学生による授業評価を実施している大学は、1992年には38校であったものが、2002年度には513校と急増し、4年制大学の76%が実施するに至った<sup>1)</sup>。授業評価は、〈するか・しないか〉の議論を終え、今や〈どのように実施することがより有効か〉という議論にシフトしていると言える。

大学における授業評価のあり方としては、二つの方向で実践が進められている。一つは、授業アンケートなどによる授業評価であり、他方は、授業参観・授業公開など授業そのものの分析・改善である。

本学においては、開学4年目の平成17（2005）年度後期より「学生による授業評価アンケート」を全学的・組織的に導入した。FD委員会が中心となり、他大学への調査を実施し、授業評価アンケートの項目や実施方法、結果の公表を含めた活用等について検討し、「授業評価に関するアンケート」案を取りまとめた。当初より、常勤、非常勤を問わず、実習および卒業研究以外の全講義・演習科目について実施する運びとなった。

全学的な授業評価導入から2年目を迎えると、現行授業評価の内容および方法について課題が見え始めた。〈評価内容〉については、講義・演習科目の別なく同一の質問項目で実施しており、その限界が表面化してきた。さらには、看護学の授業において重要な位置づけにある実習については、全学的な実施に至っていなかった。〈評価方法〉に関しては、授業評価の実施時期が、全授業の終了時のみであるため、タイムリーに授業改善に結びつかないこと、さらには外部委託のため集計に時間がかかり、担当教員へのフィードバックがsemesterを越えて遅れることなどがあげられた。「学生による授業評価」を授業改善にいかすためには、授業評価内容を見直すとともに、学生と教員との双方向性のあるタイムリーな評価システムを構築する必要性を認めた。そこで、文部科学省による私立大学経常費補助金「私立大学教育研究高度化推進特別補助」（平成18年度から20年度）を受けて、本事業に取り組む運びとなった。

本報告書では、3ヵ年計画として立案した本事業の全体概要について述べ、平成18年度と19年度の活動内容および成果について中間報告を行うものである。最後に、これらの成果を踏まえ、最終年度となる平成20年度の活動計画について述べる。

事業組織	代表者	：本田 多美枝（日本赤十字九州国際看護大学 准教授）
	メンバー	：松尾 和枝（日本赤十字九州国際看護大学 講師）
		濱田 維子（日本赤十字九州国際看護大学 講師）
		阿部 オリエ（日本赤十字九州国際看護大学 講師）

文献

- 1) 木野茂: 大学授業改善の手引き－双方向授業への誘い、pp.21-22、ナカニシヤ出版、2005.

文責：本田多美枝

## II. 事業の概要

### 1. 目的

本事業は、従来から大学教育の質管理のために行っている「学生による授業評価」を、タイムリーに機能する形成評価として、また、学生と教員との双方向の評価として機能させる授業評価システムの構築を目指している。そのことにより、授業評価・改善のサイクルを活性化させ、教育内容・方法の改善に向けた組織的なFD活動の推進を図ることを目的とした。

### 2. 事業内容

この授業評価・改善システムは、次の三つのコンセプトをもったコンピュータシステムである。

- ① 学生による授業評価の即時の把握と、その活用による継続的な授業改善を可能にする。
- ② システム上で授業に関する学生と教員の双方向の意見交換、評価を可能にする。
- ③ 全学的に取り組むことで、大学全体の教育の質向上に寄与する。

つまり、発展的な授業評価・改善のサイクルを支援するシステムを構築し、活用するものである。

### 3. 事業計画

本事業は、学生・教員・大学管理者が一体となって取り組むことが重要であるため、事前調査、システム構築、運用、評価の過程において、常に三者が参加しながら計画を遂行する。まず、調査により本学に適切な授業評価・改善のシステム概要を描き、コンピュータシステムの仕様作成、運用のための学習会を経て導入し、評価を行う。最終年度には、システムの使用・運用方法について最終評価を行い、より有用なシステム構築をめざす。

具体的な3ヵ年計画は以下の通りである。

#### 1) 平成18年度

初年度は、2つの調査を行う。ひとつは、本学の学生・教員・大学の管理者に対して、現在行っている授業評価の活用度・課題を問い、有用なシステムの概要を描く。もうひとつは、授業評価に関する既存のコンピュータソフトの機能を調査することで、本学のシステムへの適用可能性を探ることである。

#### 2) 平成19年度

2年目は、新しい授業評価・授業改善システム構築に向け、必要なハード、ソフトを明確にし、導入のための仕様を作成する。さらに、全学的に取り組むよう説明会、学習会を開催した上で、試験的に導入運用する。中間評価として、授業日程が終了した時点で学生、教員、大学管理者に対し、量的・質的に調査を行い、その結果を報告書にまとめる。

### 3) 平成 20 年度

3 年目は、中間評価を受け、システムの仕様・運用方法を見直し調整する。さらに、授業改善に向けて機能するよう、継続的な学習会や有効な活動方法の模索により、システムを軌道にのせる。以上から、本事業の最終評価を行う。

### 4. 期待される成果

本システムにより、授業評価と授業改善に学生・教員・大学管理者が関わり、有機的に機能することで、教育の質向上や学習成果が見込まれる。さらに、学生による授業評価を、形成的・双方向的評価として授業改善に活かし、循環・発展させる取り組みが、他大学への先駆的モデルとなりうると考えた。

文責：本田多美枝

### Ⅲ. 平成 18 年度の活動内容および成果

平成18年度は、「学生参加による循環型授業評価・授業改善システムの構築」に向けた事前調査として、＜授業評価システムに関する他大学の取り組み成果についての調査＞と＜本学の学生および教員を対象とした「授業評価に関する質問紙調査」＞を実施した。

#### 1. 授業評価システムに関する他大学の取り組みに成果についての調査

##### 1) はじめに

大学において、学生による授業評価は定着しつつあるが、授業評価の結果を、授業改善に反映する組織的取り組みを行っているのは、国立・公立・私立全体で 335 大学（約 47%）<sup>1)</sup>程度との報告がある。

本学においても、教員の授業改善への意識向上と教育の質改善を目的として、平成 17 (2005) 年度後期から学生による授業評価（以下、授業評価とする）を、看護学実習と卒業研究を除くすべての科目を対象に実施している。

しかし、授業改善に反映するための組織的取り組みとしては、以下の理由から、不十分であったと考える。すなわち、従来の方法では、科目の授業がすべて終了した時点で評価しており、学生からの評価を当該科目の授業改善に活かすことは不可能であった。さらに、授業は学生と教員が相互に創りあげるものであるが、授業評価が学生の一方的な意見の集約にとどまり、教員からタイムリーにフィードバックすることが困難であった。つまり、組織的には、授業評価を授業改善に反映するには不十分な体制であったといえる。

以上のことから、授業評価を、タイムリーな形成評価として、また、学生と教員の双方向評価として機能させる仕組み作りが急務である。こうした機能を持つためには、コンピュータシステムを活用した授業評価システムの構築が必要と考える。

##### 2) 目的

有用な授業評価システムを描くために、わが国のコンピュータによる授業評価システムに関する研究を調査し、その成果および課題を明確にする。

##### 3) 調査方法

###### (1) 対象文献の選定

###### ①検索に使用したデータベース

JSTPlus（科学技術全分野）+JMEDPlus（国内の医学関連分野）を用いた。さらに、大学の研究紀要を含む CiNii を用い、追加選定を行なった。

###### ②検索期間およびキーワード

2002 年～2007 年の 5 年間とし、「授業評価」、「システム」のキーワードを用いて検索した。

###### ③論文の種類および選定

会議録を除き、JSTPlus+JMEDPlus では 56 件、CiNii では 63 件の文献を抽出した。重複する文献を選択し、「コンピュータシステムによる授業評価」について論じている 27 件を対象文献として選定した。

#### 4) 分析方法

- (1) 対象文献について、発表年、研究者の所属分野等の属性によりデータ化し分類した。
- (2) 対象文献の内容を熟読し、テーマの意味の類似性に基づいて分類した。

#### 5) 結果

##### (1) 対象文献数の年次推移 (図1参照)

わが国の、コンピュータによる授業評価システムに関する研究は、2002年から2007年の5年間に、27件であった。文献数は、2002年では1件であったが、年々増加している。

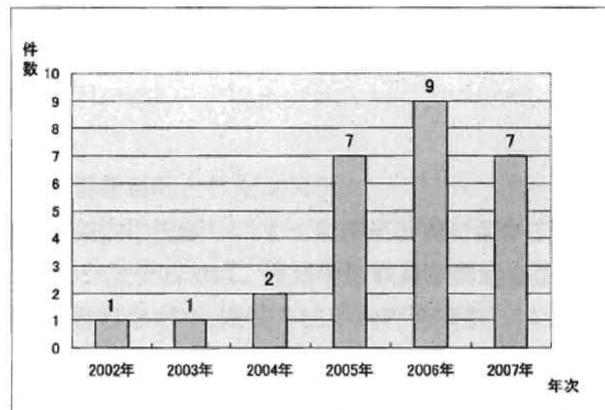


図1. 対象文献数の年次推移

##### (2) 研究者の研究分野 (図2参照)

27件の対象文献の研究者を、研究分野毎に分類したところ、情報分野の研究者が最も多く8件(29.6%)、ついで経済分野が5件(18.5%)であった。ただし、経済分野に関しては、同一研究者による報告であった。以下、さまざまな学問分野の研究者が、コンピュータによる授業評価システムに取り組んでいるが、看護を含む、保健医療分野の研究者はいなかった。

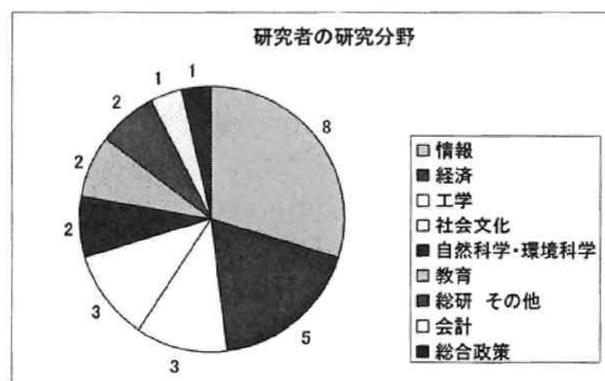


図2. 研究者の研究分野

##### (3) 授業評価システムの対象となる授業科目

27件中24件が、全学的な取り組み事例として報告されていた。残りの3件は、情報科学や

語学といった特定の科目における授業評価について論じているものであった。

#### (4) 対象文献内容の概観

各文献とも、従来の紙媒体による授業評価の課題として、教員がタイムリーに授業評価に活かさないこと、学生との双方向のやり取りができないことをあげている。その課題を解決すべく、コンピュータを活用した授業評価システムの構築に取り組んでいた。

全体を概観したところ、コンピュータによる授業評価システムは、この5年間のうちに、次のいくつかの段階を経て発展してきている。すなわち、①即時性、双方向性の確保、②システムへのアクセシビリティの改善、③自由記載データの分析、④出欠・成績・履修管理システムとの統合、⑤匿名性の確保、の段階をふみ、より多機能になってきている。

##### ①即時性、双方向性を確保

###### (i) リアルタイムの授業改善を目的としたシステム

学生による授業評価を、授業内に把握し、すぐに授業改善に活かすことを目的に作成されたシステムである<sup>24)</sup>。これらのシステムでは、授業中に教員が問題を提示したり、学生からの質問を受付けることで理解度を計りながら、授業方法や内容を調整しつつ展開することができる。

例えば、高橋ら<sup>25)</sup>は、「情報処理」の授業内に、Weblogを使って学生からの評価や質問を収集している。また、パルスら<sup>26)</sup>や河野ら<sup>27)</sup>も同様に、授業内で学生からの評価を収集しているが、同時に学生自身も、他の学生の評価を知ることができるシステムになっており、教員からのフィードバックだけでなく、ピア評価による授業の活性化をねらっている。

一方で、これらのシステムの適用は、コンピュータを授業内で使用する科目に限定されている。

###### (ii) 授業科目を限定しないシステム

授業終了後に、学生が授業評価を行なうことで、教員は、次回の授業の改善に反映させることができるシステムである<sup>28)</sup>。Webを利用したシステムが主流である。

このシステムでは、学生はいつでもコンピュータを使用し、授業評価を行なうことができ、教員もいつでも評価を閲覧することができる。つまり、授業科目でコンピュータを使用しなくても、入力作業が可能である。また、大塚ら<sup>29)</sup>のシステムでは、授業評価を実施する時期を、自由に設定できるようになっている。

##### ②システムへのアクセシビリティの改善

前述の大塚ら<sup>29)</sup>、芝ら<sup>30)</sup>のシステムにおいては、コンピュータを使用しない授業科目でも、授業評価システムにアクセスできるようになっていた。しかし、コンピュータを使用しない授業の場合、学生は、授業評価のためにわざわざパソコンを起動することになり、回収率の低下が懸念される。こうしたことから、授業科目を問わず、リアルタイムでも任意でも、学生がアクセスしやすくする工夫として、携帯電話のWebブラウザ機能を利用するシステムが開発されている<sup>7-13)</sup>。

鳥巢ら<sup>7,8)</sup>は、携帯電話を使用して、授業毎の評価を学生に回答してもらった結果、回収率が回数を重ねる事に低下し、最初の74%から最後は23%になったと述べている。しかし、次年度

の調査で、評価の回数を2-3回に減らして実施すると、ほぼ一定した回収率(約62%)を保つことができている。また、自由記載の量については、紙ベースと携帯電話入力での文字数の差はなかったと報告している。

大塚ら<sup>9)</sup>も、同様に携帯電話のWebブラウザ機能を利用したシステム改善を行ない、パソコンと携帯電話での入力操作性について比較している。結果として、自由記載の量について有意差はなく、評価値を選択して入力する方法では、携帯電話の方が、入力時間が長くなったと報告している。

大塚ら<sup>10)</sup>は、さらに、携帯電話での入力インタフェースについて検討している。

評価値を入力する方法には、プルダウン方式、ラジオボタン方式、テキストボックス方式がある。携帯電話とパソコンでの入力作業の操作性を比較すると、携帯電話では、テキストボックス方式は時間がかかることが分かった。ラジオボタン方式とプルダウン方式は、入力時間に有意差が見られなかった。しかし、ラジオボタン方式では、スクロールを多く行なうことになり、評価値の選択が画面上部のものに偏る傾向が示された。つまり、携帯電話では、プルダウン方式での回答が有効であることが報告されている。

パソコンとは違い、携帯電話での入力は、キャリア(携帯電話会社)、メーカー、機種により、操作性に差異が出てくる可能性がある。大塚ら<sup>11)</sup>は、これらの検討も行なっている。その結果、特定のキャリア利用者の入力時間が多く、キャリアの信号の強さによる影響と考えられた。また、携帯電話端末のメーカー、機種による入力時間の有意差はみられないと報告されている。

授業評価を携帯電話による入力で行なう場合、他者への「なりすまし」、パケット通信料の負担、回収率の低下などが課題としてあげられている。

### ③自由記載データの分析

授業評価のうち、学生の生の声である自由記載の分析について、鈴木<sup>12)</sup>は、テキストマイニングという方法を示している。これは、自由記載から、あるキーワードを見つけ出し集計するものであり、マーケティングリサーチ等で行なわれる方法である。

### ④統合システムとしての構築

コンピュータによる授業評価システムは、その即時性、双方向性が強化されるにつれ、統合的なシステムとして構築されつつある。つまり、授業への学生の出欠チェックおよび集計、授業資料の配布、提出物の管理、履修登録、成績管理等である。

その意図はさまざまであるが、安藤ら<sup>13)</sup>は、授業評価や学生の取り組み姿勢を、学生が相互に知ることによって、学習意欲が刺激されることを明らかにした。

また、松村ら<sup>14),15)</sup>は、教員の事務的作業の軽減につながるとして、統合システムを示している。両者とも、出欠管理のため、個人認証の過程が必要となっているが、授業評価については匿名で行なうようになっている。

### ⑤匿名性の確保

授業評価システムにおいて、回答する学生の匿名性を確保することは、プライバシーの保護とともに、率直な意見を得るために必要である。谷川ら<sup>16)</sup>は、この点から、授業評価システムが満たすべき要件として、①回答者の不正回答防止、②集計サーバへのデータの秘匿性、③プ

ライバシー管理者へのデータの秘匿性、④回答者の識別、をあげ、回答の暗号化により匿名性を確保するシステムを報告した。

また、吉川<sup>17)</sup>は、授業評価と出欠管理が統合したシステムにおいて、不正回答防止と回答の匿名化は、相反する要求であるとしている。しかし、それを両立させるために、まず、出欠管理システムからのメールを学生が開封した時点で出席登録が完了し、そのメールに記載されたURLに接続して、授業評価に回答することで、匿名性を確保するという仕組みを提案した。これは電子メールとWebを組み合わせることで、高額なシステムを別途導入することなく、対応できるとのことである。

## 6) 考察

### (1) コンピュータによる授業評価システムの動向

対象文献の検討により、2002年から2007年の5年間で、授業評価のコンピュータシステム化は、年々進んできている。その理由としては、従来の紙媒体による授業評価の課題を解決することができ、教員の事務的作業も大幅に軽減できる点にある。さらに、IT技術の進歩とともに、ますます多機能なシステムを構築することができるようになっており、運用に関する可能性が広がってきている。

また、授業評価システムの枠を超え、学生同士の双方向のやり取りによるピア評価や、出欠・提出物管理や履修登録等との統合システムとして発展してきており、大きな学習支援システムとして構築されている例もある。

しかし、大学全体から考えると、システムが導入されているのは、まだごく一部である。また、システム構築を中心的に行なっている研究者は、情報分野や工学分野が多く、研究者も限られていることがわかる。看護を含む保健医療分野では、授業評価を授業改善に活かすためのシステム化には取り組んでいるものの<sup>18)・19)</sup>、紙媒体での実施にとどまり、コンピュータを使ったシステム構築に関する文献はなかった。しかし、大学の中の一学部として、実際には使用されている可能性もある。

### (2) コンピュータによる授業評価システムの発展

コンピュータによる授業評価システムは、この5年間のうちに、①即時性、双方向性の確保、②システムへのアクセシビリティの改善、③自由記載データの分析、④出欠・成績・履修管理システムとの統合、⑤匿名性の確保、の段階をふみ、発展してきたと考える。

文献を概観すると、さまざまな機能を備えたまま、より利用しやすいシステムとして発展してきており、本学のシステムを描く時に、技術的には、これらすべての機能を搭載したシステム構築は不可能ではないと考える。また、看護学実習科目の授業評価を行なうことを考慮すると、携帯電話によるアクセスは不可欠なものとして検討する必要がある。

コンピュータによる授業評価システムの現時点での課題は、携帯電話を媒体とすることを前提として、キャリアや機種の違いによる不平等を是正すること、パケット通信料の負担を解決、匿名性の確保と不正回答防止が考えられる。

また、技術的な面に限らず、授業改善に向けた効果的なシステムとするために、授業評価を行なう時期や、データの分析方法など、運用上の検討を十分に行なう必要があると考える。

## 7) 結論

コンピュータによる有用な授業評価システムを描くために、文献検討を行なった。その結果、以下の点が明らかとなった。

- (1) 授業評価システムのコンピュータ化は、年々進んでいるが、看護を含む保健医療分野での取り組みは報告がない
- (2) システムは、Web 上に作成することにより、全学的にすべての科目で実施することが可能である
- (3) 全学的に実施するためには、媒体として携帯電話の利用が必須である
- (4) 授業評価システムは、多機能な学習支援システムの一部として発展する可能性がある
- (5) 今後の課題は、システムのハード面およびソフト面(運用上)の改善が必要である。

## 引用文献

- 1) 文部科学省高等教育局大学振興課：大学における教育内容等の改革状況について,文部科学省ホームページ [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/19/04/07041710.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/04/07041710.htm)
- 2) 高橋道郎、前田和昭：Weblog を用いた授業理解度の把握の試み。経営情報学部論集、19(1.2):45-53、2005。
- 3) トーマス・パルス、マイケル・ショウバック:コンピュータベースのフィードバック・オンラインプレゼンテーション評価システムの開発。静岡文化芸術大学紀要、7:1-6、2006。
- 4) 河野竜司、喜久川政吉：P2P ネットワークを利用した即時授業評価システム。広島工業大学紀要研究編、40:309-312、2006。
- 5) 大塚一徳、八尋剛規:Visual Basic プログラミング基礎教育における Web を利用したリアルタイム授業評価システムの運用.長崎県立大学論集、39(3):75-84、2005。
- 6) 芝治也、赤松重則他:授業評価 Web アンケートシステムの開発と実践.高知工業高等専門学校学術紀要、50:13-20、2005。
- 7) 鳥巢泰生、佐々木英洋:リアルタイム授業評価システムを活用した授業改善.大手前大学社会文化学部論集、5:129-153、2005。
- 8) 鳥巢泰生、佐々木英洋:リアルタイム授業評価システムを活用した授業改善(2).大手前大学社会文化学部論集、6:287-315、2006。
- 9) 大塚一徳、八尋剛規、大元誠:携帯電話を利用した Web による授業評価の有効性.コンピュータ&エデュケーション、15:71-75、2003。
- 10) 大塚一徳、八尋剛規:ケータイを利用した授業評価システムにおける評価値入力インタフェースの検討.日本教育工学会論文誌、30(2):125-134、2006。
- 11) 大塚一徳、八尋剛規:携帯電話を利用した授業評価システムにおけるキャリアと端末メーカーの検討。日本教育工学会論文誌、30(Suppl):33-36、2006。
- 12) 鈴木賢治：大学経営を変える「リアルタイム授業評価システム」.知的資産創造、84-87、2005。
- 13) 安藤明伸、安孫子啓：統合的な受講者管理システムの開発と授業改善への応用。宮城教育大学紀要、41:123-130、2007。
- 14) 松村賢児、黒岩丈介他:携帯端末を用いた講義運営管理システムの実装と評価.教育システム

- 情報学会誌、22(2):76-87、2005.
- 15) 松村賢児、黒岩丈介他:携帯情報端末を利用した教育到達度評価システムー出席管理システム・授業評価システム・レポート提出管理システムー.福井大学工学部研究報告、52(1):97-104、2004.
  - 16) 谷川浩司、中西透、船曳信生:プライバシーを保護した授業評価アンケートの実装.情報通信学会研究報告、106(176):145-151、2006.
  - 17) 吉川歩:出欠の個人認証と授業評価の匿名性を両立する出欠・評価収集システム.甲南会計研究、69-77、2007.
  - 18) 岩永秀子、雄西智恵美他:東海大学健康科学部看護学科におけるカリキュラム評価システムの構築 学生による臨地実習授業評価のシステム化と今後の課題.東海大学健康科学部紀要、8:37-44、2002.
  - 19) 荻野夏子、石井美里他:東海大学健康科学部看護学科における「学生による臨地実習授業評価システム」の改訂プロセスと今後の課題.東海大学健康科学部紀要、11:21-28、2006.

文責：松尾和枝

## 2. 本学の学生および教員を対象とした「授業評価に関する質問紙調査」

### 2-1. 学生を対象とした「授業評価に関する質問紙調査」

#### 1) 調査目的

現在行われている授業評価の内容（資料1）および実施方法、結果の活用等（資料2）について、問題点や課題を洗い出すことを目的に調査を実施した。

#### 2) 対象

本学の1年生118名、2年生116名、3年生124名の合計358名

#### 3) 調査時期

2007年2月

#### 4) 調査方法

無記名の自記式質問紙調査とした（資料3）。質問紙の内容は、＜授業評価アンケートの実施に関して＞、＜アンケート用紙の内容に関して＞、＜学生自身への効果に関して＞、＜授業評価結果の公表に関して＞から構成した。

質問紙の配布は、強制力が働かないよう事務職員が行い回収は設置したボックスに個人の自由意志で投函できるようにした。

#### 5) 倫理的配慮

調査は、本学の研究倫理審査委員会の承認（平成18年1月）を経て実施した。調査の目的、方法については紙面に明確に示すと共に、協力は自由意志であり、匿名性を確保してデータを使用すること、目的外のデータ使用はしないことを保障した。また、協力を拒否しても個人評価には影響しないことを明記した。

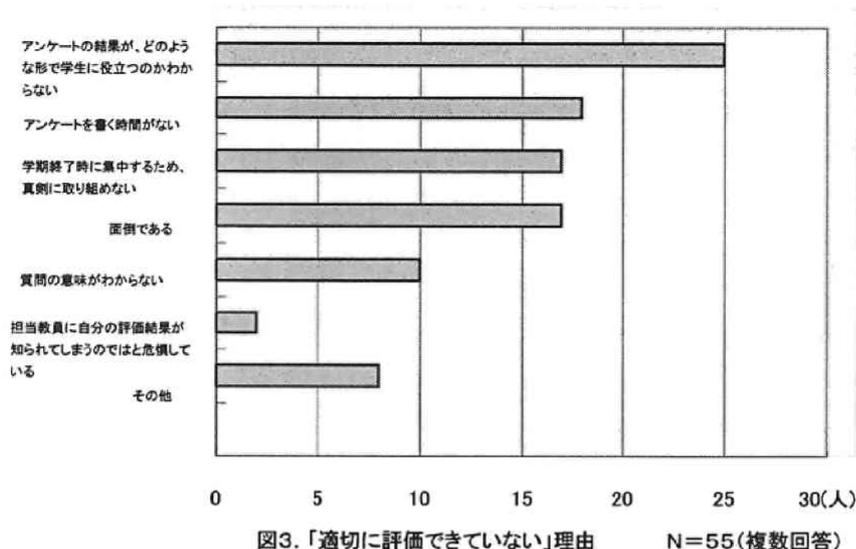
#### 6) 結果

回収数は169名（回収率47.2%）であった。学年別では、1年生67名（回収率56.7%）、2年生50名（回収率43.1%）、3年生（38.7%）、不明4名であった。

##### （1）授業アンケートの実施に関して

94%（159名）の学生が「授業評価の意義を理解して回答している」と答えたが、「適切に評価できていない」（5名）、「科目によっては適切に評価できていない」（50名）と回答した学生が併せて33%（55名）いた。

「（科目によっては）適切に評価できていない」理由については、図3に示した。多い順に「結果がどのような形で学生に役立つかわからない」（25人）、「書く時間がない」（19人）、「学期終了時に集中するため真剣に取り組めない」（17人）、「面倒」（17人）であった（複数回答）。



授業評価を適切に行うための具体的な改善策について自由記載を求めた結果、記述数は36件あった。その主なものは、「アンケート時間の確保」(11件)とともに、「授業の中間地点での実施」(6件)とそのことによる「学生への迅速な還元」(5件)、また、「科目によるアンケート内容の変更」(4件)などがあげられた。

#### (2) 授業アンケート用紙の内容について

授業アンケート用紙の内容について、「適切でない」(21名)、「科目によっては適切でない」(32名)と回答した学生は併せて76%(53名)であった。その理由を自由記述で求めた結果、「科目によっては該当しない項目がある」、「講義と実技をわけたほうがよい」、「不要な設問がある」、「理解が難しい質問項目がある」などがあげられた。

#### (3) 授業アンケートに取り組むことによる学生自身への効果

アンケートに取り組むことによって、学生自身の受講態度の改善につながったと答えた学生は38%(64名)であった。改善の具体例としては、「予習復習の必要性を認識した」、「受講態度の振り返りになった」との回答であった。

つながっていないと答えた学生は48%(81名)で、「最後に行うので次につながらない」との回答であった。

#### (4) 授業アンケート結果の公表について

授業アンケートの結果公表を希望している学生は56%(95名)であった。その理由を自由記述で求めたところ、「他の学生の評価を知りたい」(22名)との回答が最も多く、次いで「改善点を知りたい」(10名)、「公表は義務であり、知る権利がある」(5名)などがあげられた(図4)。

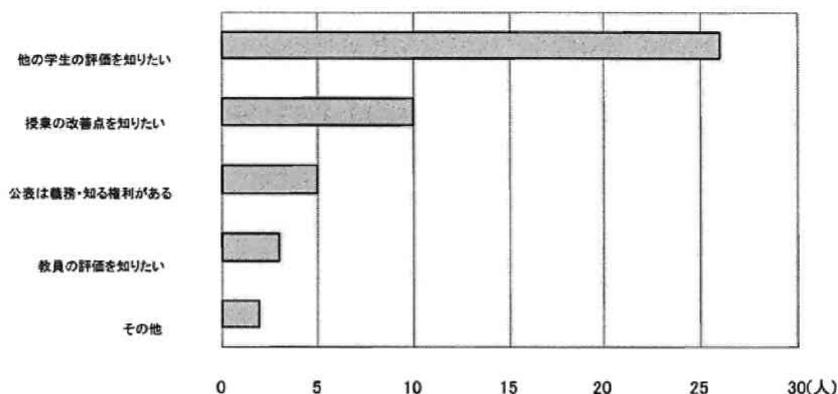


図4. 結果の公表を希望する理由 N=95

公表の仕方としては、「科目ごとの公表」を希望する学生が60名と最も多く、次いで「教員ごと」（40名）であった（複数回答可）。公表する内容としては、「結果に対する教員のコメント（授業改善など）」（63名）を望む学生が最も多く、次いで「各項目の評価点（現行どおり）」（51名）が続いた（複数回答可）。

#### （5）その他

その他、自由記述で述べられた意見として、「アンケート結果の反映（改善や公表）」を希望するものが多く、一方で、「結果が自分たちにどのように反映されるかわからないため、答える意欲が低下するのではないか」、「授業評価の重要性が学生に理解されていないのではないか」との意見があった。さらに、「授業中の私語の多さから、学生が学生を評価し、改善する必要がある」などの意見も聞かれた。

#### 7) まとめ

ほとんどの学生は授業評価の意義を理解していると回答したが、結果の活用が不明、書く時間がない等の理由から、科目によっては適切に評価できていないと感じている学生が3割いることが明らかとなった。時間確保に加え、評価結果が迅速かつ具体的に当該学生の授業に還元されるよう中間評価を望む声や、教員の改善内容を公表する要望も見られた。

以上の結果から、授業評価を授業改善に活用するためには、講義、演習、実習という授業形態の特徴を反映した評価項目を設定するとともに、当該学生の授業に、評価結果をタイムリーに反映できるような、双方向性、即時性を加味した授業評価システムの構築が必要であることが示唆された。

文責：本田多美枝

## 2-2. 教員を対象とした「授業評価に関する質問紙調査」

### 1) 調査目的

現在行われている授業評価の内容（資料1）および実施方法、結果の活用等（資料2）について、問題点や課題を洗い出すことを目的に調査を実施した。

### 2) 対象

本学の常勤教員 33名

### 3) 調査時期

2007年2月

### 4) 調査方法

自記式質問紙調査とした（資料4）。質問紙はメールにて配布し、回収ボックスに個人の意思で投函できるようにした。

### 5) 倫理的配慮

調査は、本学の研究倫理審査委員会の承認（平成18年1月）を経て実施した。調査の目的、方法については紙面に明確に示すと共に、協力は自由意志であり、匿名性を確保してデータを使用すること、目的外のデータ使用はしないことを保障した。また、協力を拒否しても個人評価には影響しないことを明記した。

### 6) 結果

回収数15名（回収率47.2%）であった。

#### （1）授業アンケートの実施・内容に関して

授業評価の意義については、全員が「大学教育の質の向上において必要である」と回答した。具体的には、学習環境・学習者のニーズを把握することで、教育方法、カリキュラムの見直し等の教育改善に結びつくといった意見が主であった。また、学生自身が学習態度を振り返る機会になるとの意見もあった。現行の授業評価の方法に関しては、以下の課題が挙げられた。

#### ①授業評価の対象科目

現在、講義・演習科目のみであるが、看護学実習における授業評価の必要性を半数の教員が述べた。

#### ②実施時期

「適切である」、「適切でない」としたものが約半数ずつであったが、その意見として、授業改善に有効活用するため中間評価を望むものが主であった。なかには、「中間評価が望ましいが、作業が煩雑になるため現行でよい」、「教員自身が、適宜中間評価をすればよい」とする意見があった。また、各科目の授業評価が同時期に集中するため、回答する学生は、慣れや面倒さか

ら適切に取り組めないとした意見もあった。

### ③配布回収方法

「適切である」が6割、「適切でない」とする回答が約3割あった。適切でない理由は、学生の匿名性を保障し、教員の強制力が関与しない配慮が必要というもので、「事務職員が配布・回収する」、「鍵つきの回収箱にする」、「電子アンケートにする」といった具体的な提案が挙げられた（図5参照）。

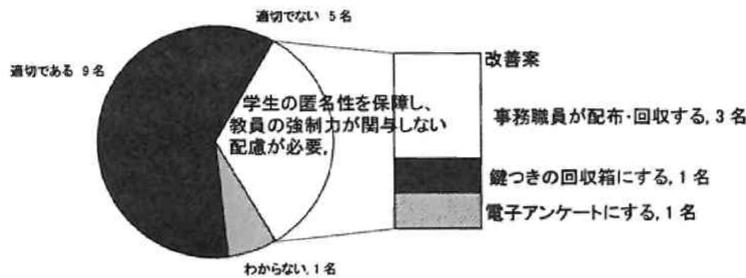


図5. 授業評価の配布・回収方法に関する回答

### ④評価内容・項目

科目全般に対する意見と、オムニバス授業に対する意見に分かれた。さらに、追加が必要な評価項目、評価方法の改正案が出された。詳細は、表1に示す。

表1 アンケート内容・評価項目に関する自由記載

授業科目全般に対して	追加が必要な評価項目	提出物に対する教員からのフィードバックの有無
		授業目標の達成度
		テキストの利用に関すること
		文献、教材の提示・活用に関すること
		出欠時間数
		遅刻回数
評価方法の改正案	点数評価でなく記述に	
	4段階評価にする(中間点を作らない)	
	自由記載欄は項目毎に作る	
授業について	追加が必要な評価項目	教員数の適切性
		講義内容の一貫性・整合性
	評価方法の改正案	一定時間以上の授業にのみ実施
		教員の自己評価を提出 教員ごとを実施する
他	演習科目や授業スタイルにより、項目を変える	
	内容が難しい科目の難易度質問は工夫が必要	
	科目間のつながり、カリキュラムの視点からの評価が必要	

## (2) 授業評価結果の活用・公表に関して

### ①評価結果の公表

第三者への公表に関して6割強が「賛成」で、理由として、「授業改善に結びつく」、「情報開示は当然である」が挙げられた。公表する範囲は、科目に関係する学生・教員のみでなく、全学生・全教員までとする意見が最も多かった（図6参照）。

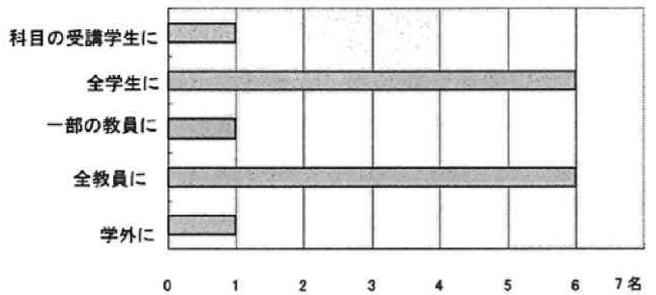


図6. 評価結果を公表する範囲 N=15

公表する内容は、評価点(現行どおり)が最も多く、ついで、自由記載内容、結果に対する教員のコメント(授業改善策)という意見が挙げられた。

### ②教員へのフィードバック方法

「数値だけではわかりにくい」、「生のデータをそのまま知りたい」、「オムニバスの場合、各教員の評価がわからない」といった意見が挙げられた。

### ③結果の活用方法

概ね、教育方法や教材の改善に活用しているという意見であった。具体的には、表2に示す。

表2 具体的な改善点

講義の組み立てを工夫する
教材の改善をする
成績評価基準を授業の最初に示す
視聴覚教材を利用する
最新の情報は吟味して示す
専門用語は日本語と英語で示す
資料の量を調整する
板書の字の大きさを変える

## 7) 考察

### (1) 授業評価による教育改善

現授業評価は、教員の授業改善への意識向上と、教育改善を目的として実施している。この点から調査結果を検討する。

#### ①教員の授業改善への意識向上

今回の調査に回答した教員全員が、「授業評価は大学教育の質向上において必要である」と回答しており、意義を認めているといえる。具体的には、学習者のニーズや学習環境を把握でき、教育改善にいかせる点を重要視している。さらに、個々の科目内での改善だけでなく、大学全体のカリキュラム構成を見据えた意見や、授業評価を促進するための積極的な意見が出ていることから、意識向上につながっていると考えられる。

しかし、調査への回答は半数の教員にとどまり、教員全体の意見を反映しているとはいえない。

## ②教育改善

授業評価を実施した効果として、教育改善につながったか否かは重要である。

多くの教員が、授業評価の結果をもとに、自身の教育方法の改善や、教材の工夫を行なっている。また、授業に取り組む学生の学習態度の改善も含めて、教育改善につながっているとの回答が見られた。

一方で、評価結果による、教育内容の改善については回答がなかった。教員へのフィードバックが、学生一人ずつの生データではなく、集計数値で行なわれていることも、教員が授業内容の改善点を見出しにくくしている要因ではないかと考える。また、オムニバス授業の場合、どの教員に対する意見なのかわかりにくく、その点も影響している可能性がある。

## (2) 授業アンケート用紙について

### ①評価項目・段階の妥当性

評価項目については、受講態度の自己評価、授業内容、授業方法について、具体的な意見が挙げられた(表2)。

文部科学省が、全国の大学に対して行なった調査によると、授業内容、授業方法、学生の取り組みを問う質問が上位を占める<sup>1)</sup>。本学の質問項目も、これに概ね一致しているが、次の点では不足しており検討が必要である。つまり、「学生の学習取り組みに関して、出席状況や事前・事後の学習などの具体的な質問」、「教員の取り組み姿勢」、「学習環境」である。

また、現在の5段階評価に対しては、「どちらでもない」という段階があり、評価があいまいになるという理由で、4段階を希望する意見も多くみられた。

### ②評価対象科目

看護学実習における授業評価の必要性が挙げられた。看護基礎教育において、看護学実習がカリキュラムに占める割合は大きい。本学においても、卒業までの取得単位の22%を占めている。看護学実習の授業評価をいかに行なうかは、今後の課題といえる。

また、看護基礎教育では、演習科目も多い。講義科目と同様の評価項目では不十分との声があり、検討の必要がある。

## (3) 授業評価の運用

### ①実施時期

現在は、各セメスター終了時に実施している。この点に関連すると思われる意見が多く見られた。授業評価を当該授業の改善に活かすためには、全部の授業が終了してからではなく、中間時点での評価が必要である。また、学生は同時期に多くの科目の授業評価を行なうことになり、「面倒」、「慣れが生じていい加減に記載する」といった状況を生んでいる。さらに、授業評価の結果が、どのように授業改善に活かされているのか、学生にわかりにくく、授業評価への取り組みを消極化させている。

このように、評価を授業改善に積極的に活かすためには、形成評価を意図した実施時期の設定が必要である。

## ②授業アンケートの配布・回収方法

配布・回収に際し、学生の匿名性を確保する必要性が挙げられた。現状においても、個人が特定されることはないが、回収ボックスに鍵がないことなどから、完全とはいええない。倫理的にも早急な改善が必要である。

## ③結果の公表

科目毎の評価点や自由記載欄とともに、担当教員の授業改善策の公表を求める意見が多い。これは、情報開示および説明責任の視点から、検討すべき事項であると考えられる。

また、結果の集計作業上の煩雑さから、教員が結果を受け取り、公表されるのは、次のセメスターが開始した後になる。授業評価は、授業改善に向けた、学生・教員双方の意見交換の機会である。現状では、このタイムラグが効果を損ねていると考えられ、集計作業、公表の方法に検討の必要がある。

## (4) 本学の授業評価・授業改善の活性化のために

本調査により、本学の授業評価を授業改善に積極的に活かす上での課題は、次の点に集約される。

- ①看護学実習に対する授業評価の導入
- ②授業形態別に、質問項目を設定
- ③授業の形成評価、改善への即時対応性のために、実施時期を調整
- ④集計作業・分析・結果通知(公表)の迅速な仕組みを構築
- ⑤授業評価に伴う、個人情報保護・管理の仕組みを整備
- ⑥授業改善に向けての、学生と教員双方向の意見交換を活発化させる仕組みを整備
- ⑦全学的に教育改善に取り組む体制を整備

## 文献

- 1) 文部科学省高等教育局大学振興課：大学における教育内容等の改革状況について、  
文部科学省ホームページ [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/19/04/07041710.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/04/07041710.htm)

文責：松尾和枝

### 3. 「看護系大学の使命 FD 活動の座標軸」日本看護系大学協議会 FD 委員会研修への参加

#### 1) 研修の概要

##### (1) 開催主旨

保健医療制度・施策の動向と看護学教育の懸隔について議論し、その懸隔を埋める教育のあり方を考える。

##### (2) 日時・場所

2006年11月25日(土) 13:00~16:30

聖路加看護大学 アリスセントジョンメモリアルホール

##### (3) 基調講演

テーマ：「専門職教育と社会貢献」

講師：鶴田 恵子 (日本赤十字看護大学教授)

##### (4) シンポジウム

テーマ：「看護大学でこそ可能な教育をめざすために」

①看護大学教育を拓く 林千冬 (神戸市看護大学教授)

②一丸の教育実践が学生と教員にもたらした効果を考える

大塚真理子 (埼玉県立大学教授)

③プロを育てるための看護教育者の役割再考

宇佐美しおり (熊本大学教授)

④FD 活動の多様な戦略

中西睦子 (国際医療福祉大学教授)

座長：本田彰子 (東京医科歯科大学大学院教授)

#### 2) 内容

日本の保健医療福祉行政が大きく変革する中、看護大学は、専門職を育成する立場として、看護学教育をどのように行なっていくべきか、また、そのためのFD活動のあり方についての議論となった。

多くの大学(一般)が、教育の質保証の仕組みを構築する中、看護大学には、「看護専門職教育の質保証」としての、明確なアウトカムを求められている。つまり、「看護実践能力とは何か」の議論に始まり、看護職にとって必要な知識・技術・態度を明確な評価指針として、社会に示す必要に迫られているといえる。

また、社会に求められる看護実践力を備えた学生を輩出するために、教育内容、実習方法、教員のFD活動を再考する必要がある、いくつかの大学の実践例が報告された。

例として、大学の運営会議の一部(実習・授業に関する内容)を学生参画型にする、授業評価のフィードバック方法を学生が決める、FD活動を臨床指導者に広げる、といった内容が紹介され、いずれも独自性があり興味深い取り組みであった。

文責：松尾和枝

#### IV. 平成 19 年度の活動内容および成果

平成19年度は、平成18年度に実施した調査結果をもとに、授業の形態に応じた授業評価フォーム（案）を作成し、このフォームを使用しての授業評価を一部試行した。同時に、教員を対象に、授業評価フォーム（案）に対する質問紙調査を実施し、これらの結果を併せて、フォームの修正を行った。修正した講義版・演習版・実習版それぞれの授業評価フォームは、管理運営会議、教授会の議を経て、平成20年度から全授業科目で使用することが決定した。さらに、コンピュータシステムを活用した授業評価の仕様を描き、一部試行すると共に、その評価を行った。

以下には、講義版・演習版授業評価フォームの作成に向けた取り組み、実習版授業評価フォームの作成に向けた取り組みについて順に述べ、最後に、コンピュータシステムによる授業評価の仕様と試行結果について報告する。

##### 1. 講義版・演習版授業評価フォーム作成の取り組み

###### 1-1. 現行授業評価フォーム（資料1）の改善点と講義版・演習版授業評価フォームの作成

18年度に実施した、本学学生を対象とした質問紙調査によると、現行の授業評価内容に対する主な問題点は、7割以上の学生にとって「(科目によっては)適切とは思えない」設問があるということである。これは主に、授業形態の異なる講義と演習の評価に同一のフォームが使用されていたことや、一部の設問が理解しにくい内容であったことから生じた結果であった。また、教員からは、「授業目標達成度の追加」、「5段階評価のあいまいさ」「オムニバス形式授業における各教員の適正な評価」に関する意見が挙がっていた。これらの改善点を中心に、複数の文献を参考にしながら、講義版・演習版それぞれの新たな授業評価フォーム（案）を作成した。

作成にあたっては、以下の事柄について、本事業組織メンバーのコンセンサスを得た。一つ目は、授業は学生と教員との相互作用で成立するものであり、教員が責任を持つべき授業と学生の学習姿勢双方を評価すべきであること、二つ目は、ひとつの授業に関わるすべての教員が評価対象であり、かつ結果を授業改善につなげる義務をそれぞれが持つこと、三つ目に、学生が学習目標を達成する上で教員が行うべき教授方法の工夫や教材の活用、理解促進のための配慮については、より明確に評価すべきこと、である。

###### 1-2. 教員を対象とした「講義版・演習版授業評価フォームに関する調査」

###### 1) 調査目的

新たに作成した講義版・演習版それぞれの授業評価フォーム（案）に対して、教員の立場からの意見を収集し、フォームの改善に役立てる。

## 2) 対象

全教員 38 名

## 3) 調査期間

2008 年 1 月～2 月

## 4) 調査方法

自記式質問紙調査とした(資料 5)。質問紙はメールにて配布し、回収は、メールによる返信もしくは回収ボックスへの投函とした。

## 5) 倫理的配慮

調査は、所定の手続きを経て実施した。具体的には、管理運営会議の議を経て、教授会で承認されたのちに実施した。教員に対しては、意見を十分に活用するため、調査目的について明記した上で、記名による調査への理解と協力を求めた。ただし、調査への協力は自由意志とした。

## 6) 結果

回収数 12 名(回収率 31.6%)

### (1) 評価内容について

「学生の自己評価では授業への参加度も評価すべきである」、「学習環境に対する評価の必要性がある」、「具体例により授業形態を限定している印象がある」という意見があった。

### (2) 設問数について

全員「適切である」という意見だった。

### (3) 4 段階評価について

全員「適切である」という意見だった。

### (4) 設問の意味について

「一部学生にとってイメージしにくい文言が含まれている」という意見があった。

### (5) 自由記載欄について

「授業の内容に関する要望を記述できるようにすべき」という意見があった。

## 1-3. 学生を対象とした「講義版・演習版授業評価フォームの試行」と「質問紙調査」

1 学年の学生を対象に、演習版授業評価フォーム(案)を使用して、実際に授業評価の施行を行った。その後、質問紙による調査(資料 6)を実施した。

#### 1) 調査目的

演習版授業評価フォーム（案）の内容に関して、学生の立場からの意見を収集し、フォームの改善に役立てる。

#### 2) 対象

1年生 109名

#### 3) 調査時期

2008年1月

#### 4) 調査方法

看護方法学IV-2の演習終了時に、作成した演習版授業評価フォーム（案）による授業評価を実施し、続けてフォームに関する質問紙調査を行った。回収は、回収ボックスへの投函とした。

#### 5) 倫理的配慮

演習版授業評価フォーム（案）による授業評価の試行とその後の質問紙調査は、所定の手続きを経て実施した。具体的には、管理運営会議の議を経て、教授会で承認されたのちに実施した。対象となる学生に対しては、調査の目的と方法について紙面と口頭にて説明を行い、実施した。調査は無記名で行い、協力は自由意志であること、また協力者の個人情報を守られること、個人評価には影響しないことを紙面上に明記し、保障した。

#### 6) 結果

回収数 105名（回収率 96.3%）

評価内容や設問数に関しては、概ね「適当である」という意見だった。評価段階に対してのみ「どちらでもない」という選択肢を求める意見がいくつかあった。

### 1-4. 講義版・演習版授業評価フォームの修正と今度の課題

#### 1) 講義版・演習版授業評価フォームの修正

授業評価フォーム（案）に対する教員および学生からの意見を集約し、検討した上で、講義版・演習版授業評価フォームをそれぞれ修正した（資料8、資料9参照）。

授業評価の構成は、4カテゴリー16項目と自由記載欄で構成した。項目数は、全授業の評価を一定時期に実施する学生の負担を考慮した。また、カテゴリーは、従来の授業評価内容と同様とした。講義版・演習版の設問内容は、それぞれの特性を考慮して作成した。

カテゴリー1は、【受講態度の自己評価】で、これは、授業評価をするにあたり学生自身が学習者としての態度を自己評価するものである。従来の授業評価では、「授業に対する取り組みが十分であった」「授業を正當に評価できる資格があると思う」といった抽象的な表現であったも

のを、講義版・演習版ともに、具体的な表現に変え、それぞれ3項目で構成した。

カテゴリー2は、【授業の内容】である。これは、講義版においては、明確な授業の目的・目標・評価方法の提示、講義の構成やめりはり、教員意見の織り込み、内容の豊富さ、新鮮さを評価する5項目から構成した。演習版においては、明確な授業の目的・目標・評価方法の提示、実践と知識の関連性、演習時間の適切さ、教員意見の織り込み、内容の新鮮さを評価する5項目で構成した。いずれも、従来の評価項目に比べて、より具体的な内容を説明し、項目数を4つから5つへ増やした。

カテゴリー3は、【授業の方法】である。これは、講義版においては、授業方法の工夫、学生の理解度の確認、学生の発言への配慮、教員の話術に加え、学習環境の調整（私語の注意など）を評価する設問を追加した5項目で構成した。演習版においては、授業方法の工夫、学生の思考過程への支援、適切な指導、教員の話術、学習環境の調整の5項目である。項目数は、従来の評価項目の3つから5つへ増やした。

カテゴリー4は、【全体評価】である。講義版・演習版ともに、授業の目標達成度、授業による学問への関心の高まり、総合満足度を評価する3項目で構成した。

自由記載欄には、上記の項目では評価できない具体的内容について自由に記載できるよう考慮した。内容は、自分自身の取り組みについて、授業で効果的だった点、授業内容や方法に関して教員に改善してもらいたい点の3項目で構成した。このうち、後者2項目については、オムニバス形式授業の評価に対応できるよう、教員氏名欄を設けた。

評価段階については、「そう思う（4点）」、「どちらかというと思う（3点）」、「どちらかというと思わない（2点）」、「思わない（1点）」の4件法とした。「どちらでもない」という選択肢は、つけやすさの面で評価をあいまいにする危険性が考えられたため、あえて削除した。

## 2) 今後の課題

平成20（2008）年4月より、作成したフォームによる全授業の評価を行う予定である。今後、結果の統計的分析により、評価内容の妥当性・信頼性を検証するとともに、授業評価のシステム化を考慮した評価得点の集計方法や解釈等について検討する必要がある。また、再度、学生・教員からの意見を集約した上で、更なるフォーム内容の改善を試みる予定である。

## 参考文献

- 1) 舟島なをみ、杉森みど里編著：看護学教育評価論、分光堂、2007、2005.
- 2) 舟島なをみ監修：看護実践・教育のための測定用具ファイル、医学書院、2007.
- 3) 細川和仁：授業評価調査における中間評価の有効性、秋田大学教養基礎教育研究年報、1-9：4-12、2007.

文責：瀧田維子

## 2. 実習版授業評価フォーム作成の取り組みに

### 2-1. 実習版授業評価フォームの作成

18年度の調査の結果、本学教員より看護学実習（以下実習とする）における授業評価の要望が高く、本事業においても実習における授業評価を課題としていた。このような背景より、本年度の新たな取り組みとして、実習版授業評価フォームの作成に着手した。取り組みのはじめに、現段階における実習の授業評価が、それぞれの領域でどのように実施されているかについての調査を実施した。その結果、9領域中6領域において授業評価として学生へのアンケートが実施されていた。アンケートにおける学生への質問項目は様々であったが、学生自身が自己の実習到達度をどのように捉えているかや、学生自身の実習に対する満足度を問うなど、中には共通した項目もみられた。アンケートの内容は、学生が自らを評価するもの、学生が教員を評価するもの、学生が臨地実習指導者を評価するものの3通りに分類され、舟島らの実習評価スケール<sup>1)</sup>も参考にしながら、実習版授業評価フォーム（案）を作成した（資料10）。

### 2-2. 本学の教員を対象とした「実習版授業評価フォームに関する質問紙調査」

#### 1) 調査目的

実習版授業評価フォーム（案）が全領域で使用可能な授業評価とするために、フォームの内容に関する教員からの意見を集約することを目的として調査を実施した。

#### 2) 対象

本学の常勤教員 38名

#### 3) 調査時期

2008年1月～2月

##### （1）調査方法

自記式質問紙調査とした（資料5）。質問紙はメールにて配布した。回収は、メールによる直接返信もしくはプリントアウトして記載したものを回収ボックスに個人の意志で投函できるようにした。

##### （2）倫理的配慮

調査は、所定の手続きを経て実施した。具体的には、管理運営会議の議を経て、教授会で承認されたのちに実施した。対象となる教員に対しては、調査の目的、方法については紙面に明確に示し、目的外のデータ使用はしないことを保障した。

##### （3）結果

回収数12名（回収率 31.6%）であった。

①質問項目は、臨地実習に関する評価内容として適切だと思うか

「適切である」という意見が大半を占めていたが、全般的に、教員や実習指導者から多く係わってもらうことがよい実習と学生が想定するのではという意見があった。また、一つの質問項目に、二つ以上の質問が盛り込まれている箇所もあるため検討が必要ではという意見もみられた。その他、質問項目の追加や表現の修正に関する意見があった。

②質問項目の数は適切か

「適切である」という意見と「項目数が多い」という意見に分かれた。質問項目の中には、内容が重なっていたり、相互に関連している項目もあるので、再検討をして質問項目を減らす方向で検討する必要性が示唆された。

③質問の意味はわかりやすいか

一部、表現に関する意見がみられたが、大半は「わかりやすい」という回答であった。

④4段階評価のつけやすさはどうか

「つけやすい」という意見であった。

⑤自由記載欄は適切か

「適切」という意見であった。

⑥その他自由記載

評価内容が明確で評価しやすく、よく練られているという意見、改善や検討を要することとして、各領域における実習評価と授業評価の内容が同じになっているものがあるので再検討してほしいという意見や、質問内容に関する意見、アンケートに担当教員名が必要であるという意見があった。

## 2-3. 本学の学生を対象とした「実習版授業評価フォームの試行」と「質問紙調査」

小児、母性、精神看護学領域における領域別実習を終えた学生を対象に、実習版授業評価フォーム（案）（資料 10）を使用し、実際に授業評価の試行を行った。その後、質問紙による調査（資料 7）を実施した。

### 1) 調査目的

実習版授業評価フォーム（案）が全領域で使用可能な授業評価とするために、フォームの内容に関する学生からの意見を集約することを目的として調査を実施した。

### 2) 対象

小児、母性、精神看護学領域別実習を終えた3年生 52名

### 3) 調査時期

2008年1月～2月

### 4) 調査方法

自記式質問紙調査とした(資料7)。質問紙は、実習版授業評価フォーム(案)と共に配布した。回収ボックスに個人の意志で投函できるようにした。

### 5) 倫理的配慮

調査は、所定の手続きを経て実施した。具体的には、管理運営会議の議を経て、教授会で承認されたのちに実施した。対象となる学生には、調査の目的、方法については紙面に明確に示すと共に、協力は自由意志であり、匿名性を確保してデータを使用すること、目的外のデータ使用はしないことを保障した。また、協力を拒否しても個人評価には影響しないことを明記した。

### 6) 結果

回収数33名(回収率63.5%)であった。

(1) 質問項目は、臨地実習に関する評価内容として適当だと思うか  
ほぼ全員が「適当である」という意見であった。

(2) 質問項目の数は適当か  
ほぼ全員が「適当である」という意見であった。

(3) 質問の意味はわかりやすいか  
ほぼ全員が「わかりやすい」という意見であった。

(4) 4段階評価のつけやすさはどうか  
「つけやすい」という回答が大半を占めたが、5名ほど「5段階評価にしてほしい」という意見があった。

(5) 自由記載欄は適当か  
ほぼ全員が「適切である」と回答した。数名の学生から、教員や指導者について意見を書ける欄を設けたことに関して好意的な意見が述べられていた。

(6) その他自由記載  
「カンファレンスに関する質問項目を増やしてほしい」という主旨の意見が数名あった。その学生たちは、実習が効果的に進んでいるか否かを図る一つの指標としてカンファレンスを位置づけていた。

## 2-4. 実習版授業評価フォームの修正と今後の課題

学生や教員からの意見をもとに実習版授業評価フォームの修正を行った。修正した実習版授業評価フォームを資料 11 に示す。主な修正点は次のとおりである。

### 1) 質問項目の内容や文章表現に関して

(1) 「一つの質問項目に、二つ以上の質問が盛り込まれている箇所がある」という意見に対しては、該当する質問項目を別々に設定した。(設問 11. 12. 14. 15. 16. 17. 18)

(2) 質問項目の追加や表現の修正に関する意見、「全般的に、教員や実習指導者から多く関わってもらうことがよい実習と学生が想定するのでは」という意見に対して検討を行なった。教員、臨地実習指導者に求める指導とは何かを議論し、それぞれの役割を整理した。結果、質問項目を以下のように変更した。(設問 21. 22. 23)

(3) 「臨地実習指導者は、実習の目的・目標の達成のために、活用できる資源などの情報を提供していた」という質問項目に関しては、実習指導者に情報提供してもらうのを待つという姿勢ではなく、学生自身がそれらの情報を自分で獲得するという姿勢の方がより必要であると判断し削除した。なお、必要なアドバイスを求める姿勢は【自己評価】で設定している。

### 2) 質問項目数に関して

(1) 教員の半数が「多い」と回答したが、学生からの意見では、質問数は「適当である」が大半であった。カンファレンスへの参加度など、内容によっては質問項目を増やして欲しいという意見も見られ(設問 7 を追加)、大幅な削除は行わなかった。

### 3) その他要望

(1) 「アンケートに担当教員名の記載が必要である」という意見があり、本学の実習形態を考えると、担当教員名記載は不可欠であると判断し、担当教員名の欄を設けた。

(2) 「各領域における実習評価と授業評価の内容が一部重なっているため再検討してほしい」との意見に対しては、授業評価において、学生の自己評価は大切な要素であり、また、授業評価は拘束力を持つものではないため、実習評価と重なる質問項目があっても妥当であると考え、修正は行わなかった。

### 4) まとめと今後の課題

以上のように、今年度の実習に関する授業評価は、実習版授業評価フォームを作成し、教員および学生からの意見を基に修正を重ね、一部の領域実習で数名の学生に質問紙による試行・調査を行った。20 年度からは、全学的に実習に対する授業評価を導入すると同時に、評価内容についても継続的に検討を重ね、学生にとっても教員にとっても有用なフィードバックができるようシステム化する予定である。

文献

- 1) 舟島なをみ 杉森みど里:看護学教育評価論－質の高い自己点検・評価の実現－、p p 46、  
文光堂、2000.

文責：阿部オリエ

### 3. コンピュータシステムによる授業評価の仕様および試行

従来の授業評価に関する課題として、タイムリーな形成評価、また、学生と教員の双方向評価として機能させる仕組み作りが急務であることが明確となった。こうした機能を持つためには、コンピュータを活用した授業評価システムの構築が必要と考え、システムの仕様作成、試作システムの評価を行なった。

#### 1) コンピュータシステムの仕様

これまでの学生および教員への調査結果、他大学のコンピュータによる授業評価システムをもとに、本学における効果的なシステムの仕様を、具体的に描いた（表3参照）。

表3 本学における授業評価システムの仕様

仕様		項目分類	
実習と講義など、評価項目を違えることができる	※	評価項目設定	授業評価システム独自の機能
基本評価項目に任意で項目を追加できる	※		
授業評価を行う時期を任意で決めることができる		評価実施サイクルの設定	
pc画面上で入力	※	入力手段	
別途、結果のOCR読み込み機能追加			
授業評価に関しては学生の匿名性が確保される	※	プライバシーの保護	
システム上で集計ができる(外部委託しなくてよい)	※	データの量的分析 集計・統計処理	
授業評価の結果を時系列でみることができる			
結果の統計処理ができる			
評価結果を図・表で示すことができる			
領域ごと、教員ごとの結果集約ができる			
項目ごとの順位付けができる			
自由記述データの解析		データの質的分析	
教員個人が結果を公開する範囲を任意で決めることができる		結果の公表	
結果を学生および教員がすぐみることができる	※		
教員の閲覧範囲を任意に設定できる(管理する職位による範囲の設定)	※	授業の質管理	
評価に対するコメントをシステム上で返すことができる		双方向性	
掲示板機能 学生と教員のやり取りができる			
外部パソコンからアクセスできる		外部からのアクセシビリティ	大学のコンピュータシステムに共通する機能
携帯電話からアクセスできる			
授業評価以外に、出欠確認ができる		科目履修・成績管理システムとの関連	
授業評価以外に、授業で使用する資料の掲載ができる			
授業の理解度を把握するための小テスト、個人の成績把握ができる			
シラバスとのリンクができる			

#### 2) 試作システムの作成

仕様にに基づき、まず、「授業評価システム独自の機能」に関する項目（表3の※印部分）について、試作システムの作成を専門家に依頼した。授業評価フォームに関しては、従来のフォームをベースとした。

システムの概要は、図7、図8のとおりである。

①授業評価の URL をクリックすると、以下の画面が表示される

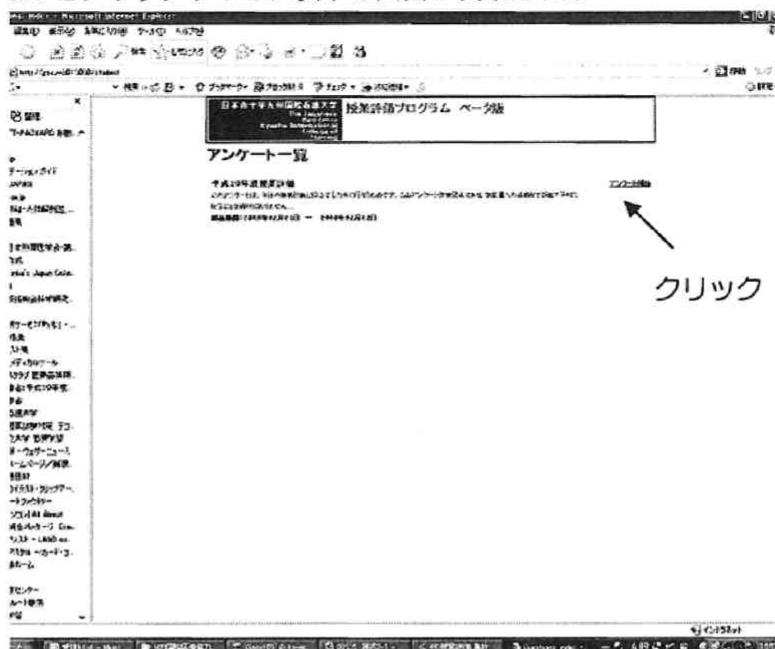


図7. 授業評価システムログイン画面

②次画面にて、授業科目名を選択し、各質問項目をチェックすることで回答

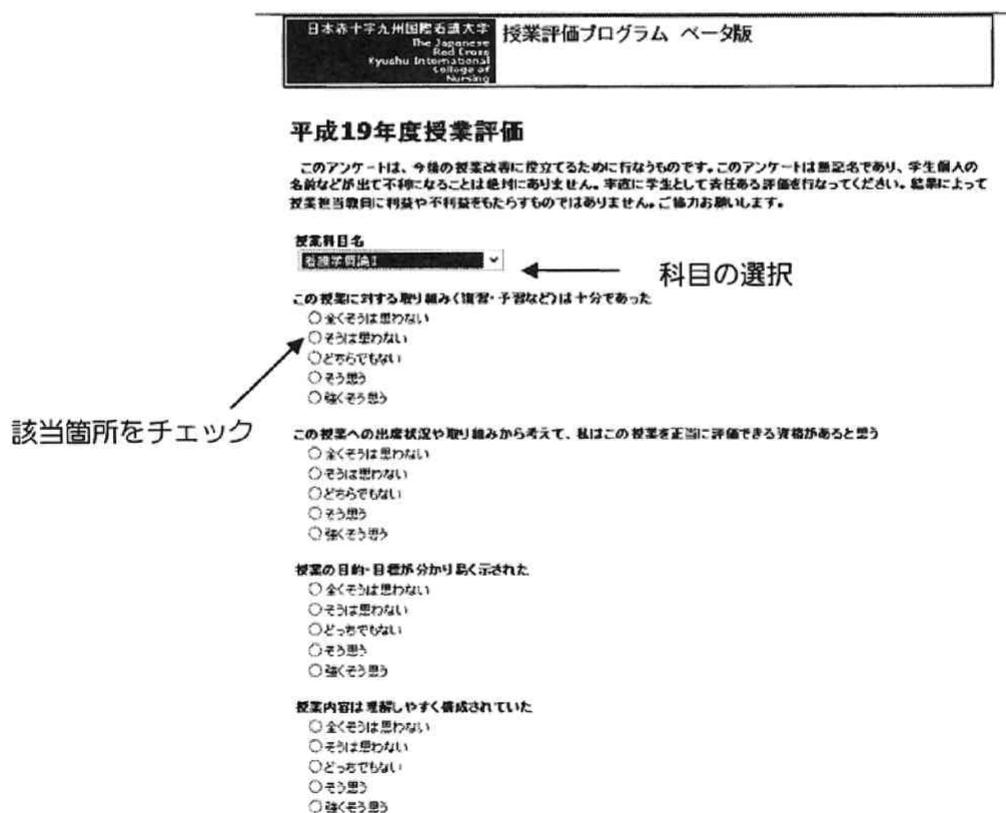


図8. 授業評価システム回答画面

③最後に、送信ボタンを押すことで、回答が完了する(匿名性は確保されている)

### 3) 試作システムに関する調査

#### (1) 目的

試作システムに関する課題を明確にし、有効な授業評価システム開発につなげる。

#### (2) 調査時期

2008年2月21日～28日

#### (3) 対象

3年生 102名

#### (4) 調査方法

- ①対象学生に、講義科目終了後、「授業についてのアンケート」試作システムを使って回答してもらう(パソコン入力)
- ②パソコン入力の実施後に、試作システムに関する自記式質問紙調査(資料12)を実施

#### (5) 倫理的配慮

調査は、所定の手続きを経て実施した。具体的には、管理運営会議の議を経て、教授会で承認されたのちに実施した。対象となる学生には、調査の目的、方法について紙面に明確に示すと共に、協力は自由意志であり、匿名性を確保してデータを使用すること、目的外のデータ使用はしないことを保障した。また、協力を拒否しても個人評価には影響しないことを説明した。

#### (6) 結果

##### ①回収結果

パソコン入力を実施した学生数	71名
システムに関するアンケート回答数	42名(回収率 59.2%)

##### ②回答内容の概要

- ・入力作業にかかる時間について  
「1分から3分程度」との回答が大半を占めるが、パソコン起動時間を含めると、「最高10分」との回答が数件あった。
- ・操作方法のわかりやすさ  
9割程度の学生が、「わかりやすい」と回答した。
- ・画面表示のわかりやすさ  
8割程度の学生が、「わかりやすい」と回答した。  
自由記載欄の入力可能文字数については、「支障なし」との回答が多かった。

##### ③その他 意見

- ・学外パソコンや携帯電話での入力ができるようにしてほしい(全体の3割程度が回答)。

理由として、パソコン起動の面倒さ、パソコン台数の不足があがった。

- ・ 確実に匿名性が保たれているか気になるといった回答があった。
- ・ チェックボタンの配列は、高点数から開始した方がよいといった回答があった。
- ・ 科目選択の欄は、表示される科目が多くて探しづらく、学年・学期別を希望する意見があった。
- ・ 入力内容を再確認するページが必要との意見があった。

#### (7) まとめ

試作システムに関する意見は、操作性、画面表示に関しては概ねよいとの評価であった。しかし、学内のパソコン台数が限られていること、授業評価のためだけにパソコンを起動する面倒さに関連した意見も聞かれた。

今後、意見をもとにシステムの修正を行なうとともに、授業評価をコンピュータシステム上で運用するときのハード面、ソフト面の課題を明確にする必要がある。

文責：松尾和枝

## V. 平成 20 年度の活動計画

3 年目となる平成 20（2008）年度は、これまでの取り組みを踏まえて、以下の活動を行う。

1. 講義版、演習版、実習版授業評価フォームのそれぞれについて、評価内容の妥当性を継続検討する。
2. 専門家および本学のシステム化委員会との連携のもと、授業評価コンピュータシステム（以下、PC 版授業評価とする）の仕様に関して修正を行なう。
3. 授業評価システムを、多機能な学習支援システムの一部として発展する可能性について検討する。
4. PC 版授業評価の運用に向け、ハード面およびソフト面の課題を明確にした上で、整備を行なう。併せて、媒体として携帯電話の利用可能性を検討する。
5. 全学的に授業評価・授業改善に効果的に取り組むことができるよう説明会や学習会を開催した上で、PC 版授業評価を試験的に導入運用し、評価を行う。
6. PC 版授業評価を、形成的・双方向的評価として授業改善に活かすための課題を明確にし、改善に向けて取り組む。

以上の活動を通して、本事業の最終評価を行い、「学生参加による循環型授業評価・授業改善システム」を軌道にのせる。

文責：本田多美枝

# 資料

## 授業についてのアンケート

授業科目名					
アンケート実施日	平成	年	月	日 ( )	時限目

このアンケートは、今後の授業改善に役立てるために行うものです。  
 このアンケート用紙は無記名であり、学生個人の名前などが出て不利になることは絶対にありません。  
 率直に学生として責任ある評価を行ってください。ご協力をお願いします。  
 また、結果によって授業担当教員に利益や不利益をもたらすものではありません。

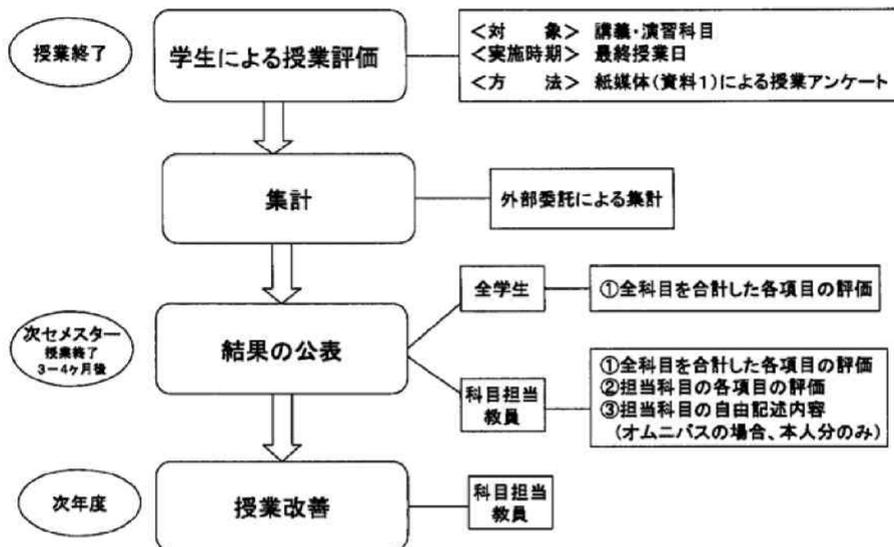
以下の質問項目に対し、該当欄に○印を付けてください。		1 全くそう は思わな い	2 そうは思 わない	3 どちらで もない	4 そう思う	5 強くそう 思う
自己評価 受講態度の	1. この授業に対する取り組み(復習・予習など)は十分であった					
	2. この授業への出席状況や取り組みから考えて、私はこの授業を正當に評価できる資格があると思う					
授業内容	3. 授業の目的・目標が分かり易く示された					
	4. 授業内容は理解しやすく構成されていた					
	5. 授業内容の量は適切であった					
	6. 授業内容の難易度は適切であった *不適切とした理由 (○で囲む) 易しすぎる ・ 難しすぎる					
授業の方法	7. 学生の理解度を確認しながら進めていた					
	8. 授業に参加できるよう学生の質問・発言などの機会を設けた					
	9. 教材資料(プリント、黒板、スライドなど)を有効に利用していた					
全体評価	10. 成績評価の基準は適切に示された					
	11. 授業により知的な刺激を受け、問題意識や関心が深まった					
	12. 総合的に判断して、この授業に満足した					

13. 教員に改善してもらいたい点、分かりやすく工夫されていた箇所、自分自身の反省、などこの授業について思ったことを自由に記載してください。  
 なお、オムニバスの場合は、( )に教員の氏名を記入の上、自由に記載してください。

( )

( )

## 現行授業評価の実施方法



学生のみなさんへ

「授業アンケート」に関する調査  
ご協力をお願い

本学では、「授業についてのアンケート」（添付資料）を各科目終了時に実施しています。その趣旨は、学生のみなさんから授業の評価を受け、授業の改善につなげようとするもので、全科目共通で実施するようになって1年半が経過しました。

今回、その見直しを行う目的で、授業アンケートに対する学生のみなさんのご意見をお聞かせいただきたく、調査を実施することになりました。みなさんからお寄せいただいたご意見は、授業評価の実施改善に向けた資料として活用させていただきたいと考えています。ご多忙のこととは思いますが、趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いします。

なお、調査は無記名で行いますので、個人が特定されることはありません。回答には5分程度かかりますが、調査への協力は自由意志で、拒否しても成績等に影響することは一切ありません。また、調査結果は、掲示によってみなさんにお知らせいたします。調査目的以外に結果を使用することはありません。

ご協力いただける方は、調査用紙に記入の上、事務室前に設置した回収ボックスに提出してください。\_\_\_月\_\_\_日までをお願いします。みなさんの率直なご意見をお待ちしています。

質問がありましたら、いつでも、下記にご連絡ください。

<連絡先>

日本赤十字九州国際看護大学

415 研究室 本田多美枝

TEL : 0940-35-7037

t-honda@jrckicn.ac.jp

414 研究室 松尾和枝

TEL : 0940-35-7038

ka-matsuo@jrckicn.ac.jp

309 研究室 江島仁子

TEL : 0940-35-7043

h-ejima@jrckicn.ac.jp







教員各位

## 「授業アンケート」に関する調査 ご協力をお願い

本学では、「授業についてのアンケート」（添付資料）を各科目終了時に実施しています。その趣旨は、学生からの授業評価を、授業の改善につなげようとするもので、全科目共通で実施するようになって1年半が経過しました。

FD 委員会では、より効果的に授業改善に活用することを目指し、現在の授業評価の仕組みをさらに発展させたいと考えております。今回、文部科学省の大学教育高度化推進特別経費により、授業評価システムの構築に取り組むことになりました。

教員の皆様には、現状における問題点・改善点に関するご意見をお聞かせいただきたく、調査を実施することにいたしました。お寄せいただいたご意見は、授業評価の実施改善に向けた資料として活用させていただきたいと考えています。ご多忙のこととは思いますが、趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いいたします。

なお、調査は無記名で行いますので、個人が特定されることはありません。回答には15分程度かかりますが、調査への協力は自由意志で、拒否しても個人評価等に影響することは一切ありません。また、調査結果は、レポート等によってみなさんにお知らせいたします。調査目的以外に結果を使用することはありません。

ご協力いただける方は、メールで送付した調査用紙に記入の上、事務室内に設置した回収ボックスに提出してください。2月23日までにお願いします。皆様の率直なご意見をお待ちしています。

質問がありましたら、いつでも、下記にご連絡ください。

<連絡先> FD 委員 本田多美枝 松尾和枝 k 江島仁子



## 「授業についてのアンケート」に関する調査（教員用）

## 1. 授業評価の実施について

1) 「授業についてのアンケート」による授業評価の意義について、考えをお聞かせください。

2) 現在の評価対象（講義を主とする科目のみ）は適当だと思いますか？

その理由と、②の場合の改善策をお答えください。

① はい

② いいえ

( )

3) 現在、学生による各科目の評価は、適切に行えていると思いますか？

その理由と、②の場合の改善策をお答えください。

① はい

② いいえ

( )

4) 「授業についてのアンケート」の実施時期、回数は適当だと思いますか？

その理由と、②の場合の改善策をお答えください。

① はい

② いいえ

( )

5) アンケートの配布・回収作業について、現在の方法は適切だと思いますか？

その理由と、②の場合の改善策をお答えください。

① はい

② いいえ

( )





※ ここからは、授業評価の活用に関する社会の動向を鑑み、ご参考までにご意見をお聞か  
いただければと思います。

1. 授業評価の結果を、教育業績の資料として用いることについて賛成か否かお答えください。  
また、その理由をお答えください。

①賛成                      ②反対

理由 ( )

2. 授業評価の結果を、研究の傾斜配分の根拠資料として用いることについて賛成か否かお答えく  
ださい。また、その理由をお答えください。

①賛成                      ②反対

理由 ( )

ご協力ありがとうございました。

教員各位

＜授業評価アンケート（講義版、演習版、実習版）＞フォームに関する調査  
ご協力をお願い

本学では、学生による授業評価を全科目共通で実施するようになって 2 年半が経過しました。その趣旨は、学生からの授業評価を授業改善につなげようとするものです。

私たちは、現在の授業評価の仕組みをさらに発展させる目的で、新旧 FD 委員をメンバーとして、「学生参加による循環型授業評価・授業改善システムの構築」（平成 18～20 年度文部科学省大学高度化推進特別経費）に取り組んでおります。昨年度は、この活動の一環として、学生および教員対象の＜授業評価に関するアンケート調査（平成 19 年 2 月）＞を実施しました。この調査では、現行の授業評価の内容や方法に関して、多数のご意見が寄せられました（平成 19 年 7 月に報告）。本年度は、この調査結果および既存の文献をもとに、現行の授業評価アンケート（講義版）の見直し・修正をすると共に、ご要望の強かった演習版および実習版それぞれの授業評価アンケート用紙（案）を新規に作成いたしました。

今回、教員の皆様には、講義版（添付資料 1）・演習版（添付資料 2）・実習版（添付資料 3）それぞれの授業評価アンケート用紙の内容に関してご意見をいただきたく、調査を実施することにいたしました。この調査は記名式で行い、お寄せいただいたご意見をもとに、内容の見直しを行いたいと考えております。ご多忙のこととは存じますが、趣旨をご理解いただき、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

ご協力いただける方は、添付した調査用紙に記入の上、本田多美枝 [t:honda@jrckicn.ac.jp](mailto:t:honda@jrckicn.ac.jp) までメールにてご返信ください。講義版、演習版、実習版それぞれの授業評価アンケート用紙（添付資料 1～3）に直接書き込んで添付して下さっても結構です。締め切りは、平成 20 年 1 月 28 日（月）17 時までにお願いいたします。また、質問等ありましたら、いつでも、以下の担当者にご連絡ください。

＜連絡先＞

代表 本田多美枝  
メンバー 松尾和枝（基礎）  
濱田維子  
阿部オリエ

＜授業評価アンケート（講義版、演習版、実習版）＞フォームに関する調査用紙

以下の項目を参考に、授業評価アンケート用紙（添付資料1～3）それぞれの内容に関して、改善したほうがよいと思う点を、理由と共にご記入ください。

教員名（ ）

1. 質問項目は、講義／演習／臨地実習に関する評価内容として適切だと思うか

【講義版】

【演習版】

【実習版】

2. 質問項目の数は適切か

【講義版】

【演習版】

【実習版】

3. 質問の意味はわかりやすいか

【講義版】

【演習版】

【実習版】

4. 4段階評価のつけやすさはどうか

【講義版】

【演習版】

【実習版】

5. 自由記載欄は適切か（記載欄の量、記載方法、記載項目など）

【講義版】

【演習版】

【実習版】

6. その他、ご意見がありましたら、自由に記述してください。

ご協力ありがとうございました

日本赤十字九州国際看護大学：本田多美枝、松尾和枝(基礎)、濱田維子、阿部オリエ

学生みなさんへ

「授業アンケート」に関する調査  
ご協力をお願い

本学では、「授業についてのアンケート」を各科目終了時に実施しています。その趣旨は、学生みなさんから授業の評価を受け、授業の改善につなげようとするものです。

今回、授業アンケートの見直しを行い、内容の改正を行いました。新しい授業アンケート用紙について、みなさんの意見をお聞かせください。

なお、調査は無記名で行いますので、個人が特定されることはありません。

以下の項目を参考に、アンケート用紙に関して改善したほうがよいと思う点を、理由と共に記述してください。裏の授業アンケート用紙に直接書き込んでも結構です。

- ① 質問項目は、実技を伴う演習科目の評価内容として適当だと思うか
- ② 質問項目の数は適当か
- ③ 質問の意味はわかりやすいか
- ④ 4段階評価のつけやすさはどうか
- ⑤ 自由記載欄は適当か（記載欄の量、記載方法、記載項目など）
- ⑥ その他（自由に記述してください）

ご協力ありがとうございました

日本赤十字九州国際看護大学：本田多美枝、濱田維子、阿部オリエ、松尾和枝（基礎）

学生のみなさんへ

「授業アンケート」に関する調査  
ご協力をお願い

本学では、学生からの授業評価を授業改善につなげるという趣旨で、「授業についてのアンケート」を各科目終了時に実施しています。しかし、これまで臨地実習については、領域毎に実施の有無やスタイルが異なっていました。

今回、臨地実習についても、大学全体で授業アンケートを行うことになりました。実習版の授業アンケート用紙について、ぜひみなさんの意見をお聞かせください。

なお、調査は無記名で行いますので、個人が特定されることはありません。

以下の項目を参考に、アンケート用紙に関して改善したほうがよいと思う点を、理由と共に記述してください。授業アンケート用紙に直接書き込んでも結構です。

- ① 質問項目は、臨地実習に関する評価内容として適当だと思うか
- ② 質問項目の数は適当か
- ③ 質問の意味はわかりやすいか
- ④ 4段階評価のつけやすさはどうか
- ⑤ 自由記載欄は適当か（記載欄の量、記載方法、記載項目など）
- ⑥ その他（自由に記述してください）

ご協力ありがとうございました

日本赤十字九州国際看護大学：本田多美枝、濱田維子、阿部オリエ、松尾和枝（基礎）

## 授業評価アンケート 【講義用】

授業科目名 ( ) アンケート実施日 年 月 日

このアンケートは、科目担当教員が、今後の授業改善に役立てることを目的として行なうものです。

授業は、学生と教員との相互作用により成立しています。今後の授業を、学生と教員が協働して改善していくために、率直な意見をお聞かせください。なお、アンケートは無記名であり、学生の個人情報は守られます。また、回答の結果が個人の成績評価に影響するようなことは決してありません。

以下の質問項目に対し、1～4までの該当する番号1つに○をつけてください。

[ 4 : そう思う 3 : どちらかというと思う 2 : どちらかというと思わない 1 : 思わない ]

## 【自己評価】

- |  |   |   |   |   |
|--|---|---|---|---|
| 1. 私は、事前に授業内容の確認や予習を十分に行った               | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. 私は、授業中にノートをとる、集中して話を聞くなど、内容を理解する努力をした | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. 私は、授業後に疑問点を調べる、質問するなど、学習を深める努力をした     | 4 | 3 | 2 | 1 |

## 【授業の内容】

- |                                  |   |   |   |   |
|----------------------------------|---|---|---|---|
| 4. 教員は、授業の目的・目標・評価方法を明確に示していた    | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5. 教員は、授業内容を系統的に構成し、重要な点を明確にしていた | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6. 教員は、表面的でなく豊富で充実した授業内容を提供していた  | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7. 教員は、自身の考えや知見を適度に示していた         | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8. 教員は、最新の情報や研究結果を授業内容に反映させていた   | 4 | 3 | 2 | 1 |

## 【授業の方法】

- |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| 9. 教員は、効果的な授業となるよう様々な工夫をしていた<br>(プリント・スライドの活用、実例を示す・グループワーク等) | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10. 教員は、学生の理解度を確認しながら進めていた                                    | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11. 教員は、学生の発言内容をとりあげて授業を進めていた                                 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12. 教員は、学生が授業に集中できるよう学習環境の調整を行なった(私語を注意など)                    | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13. 教員の説明は、明瞭で理解しやすかった  | 4 | 3 | 2 | 1 |

## 【全体評価】

- |                                    |   |   |   |   |
|------------------------------------|---|---|---|---|
| 14. 私は、授業の目標を達成することができた            | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15. 私は、授業により知的な刺激を受け、学問に対する関心が高まった | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16. 私は、総合的に判断して、この授業に満足した          | 4 | 3 | 2 | 1 |

★ 自由記載欄 ※オムニバス形式の授業の場合は、( ) 欄に教員の氏名を記入の上、記載してください

1. 自分自身の取り組みについて
  
2. 授業全体を通して効果的だった点について  
( )  
  
( )
  
3. 授業内容や方法で、教員に改善してもらいたい点について  
( )  
  
( )
  
4. その他

## 授業評価アンケート 【演習科目用】

授業科目名 ( ) アンケート実施日 年 月 日

このアンケートは、科目担当教員が、今後の授業改善に役立てることを目的として行なうものです。

授業は、学生と教員との相互作用により成立しています。今後の授業を、学生と教員が協働して改善していくために、率直な意見をお聞かせください。なお、アンケートは無記名であり、学生の個人情報を守られます。また、回答の結果が個人の成績評価に影響するようなことは決してありません。

以下の質問項目に対し、1～4までの該当する番号1つに○をつけてください。

[ 4 : そう思う 3 : どちらかというと思う 2 : どちらかというと思わない 1 : 思わない ]

## 【自己評価】

- |                                      |       |   |   |   |   |
|--------------------------------------|-------|---|---|---|---|
| 1. 私は、事前に演習内容の確認や予習を十分に行った           | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. 私は、演習の目的を理解し、時間を有効に使いながら主体的に取り組んだ | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. 私は、授業後に自主練習をする、質問するなど、学習を深める努力をした | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |

## 【授業の内容】

- |                                 |       |   |   |   |   |
|---------------------------------|-------|---|---|---|---|
| 4. 教員は、授業の目的・目標・評価方法を明確に示していた   | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5. 演習は、実践と知識が結びつく内容であった         | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6. 教員は、演習を行う時間を十分に確保して授業を構成していた | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7. 教員は、自身の考えや知見を適度に示していた        | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8. 教員は、最新の情報や研究結果を授業内容に反映させていた  | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |

## 【授業の方法】

- |  |       |   |   |   |   |
|--|-------|---|---|---|---|
| 9. 教員は、効果的な授業となるよう様々な工夫をしていた<br>(模型・ビデオ等の活用、デモンストレーション・グループワーク等) | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10. 教員は、学生が自分で考えながら行動できるよう関わっていた                                 | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11. 教員は、必要時に適切なアドバイスや指導を行っていた                                    | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12. 教員は、学生が授業に集中できるよう学習環境の調整を行なった(私語を注意など)                       | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13. 教員の説明は、明瞭で理解しやすかった   | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |

## 【全体評価】

- |                                    |       |   |   |   |   |
|------------------------------------|-------|---|---|---|---|
| 14. 私は、授業の目標を達成することができた            | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15. 私は、授業により知的な刺激を受け、学問に対する関心が高まった | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16. 私は、総合的に判断して、この授業に満足した          | ..... | 4 | 3 | 2 | 1 |

★ 自由記載欄 ※複数の教員が関わる場合は、( ) 欄に教員の氏名を記入の上、記載してください

1. 自分自身の取り組みについて

2. 授業全体を通して効果的だった点について  
( )

( )

3. 授業内容や方法で、教員に改善してもらいたい点について  
( )

( )

4. その他

## 授業評価アンケート 【実習用】 (案)

授業科目名 ( ) アンケート実施日 年 月 日  
 実習施設 ( ) 実習病棟 ( )

このアンケートは、科目担当教員が、今後の授業改善に役立てることを目的として行なうものです。  
 授業は、学生と教員との相互作用により成立しています。今後の授業を、学生と教員が協働して改善していくために、率直な意見をお聞かせください。  
 なお、アンケートは無記名であり、学生の個人情報を守られます。また、回答の結果が個人の不利益になることは決してありません。

以下の質問項目に対し、1～4までの該当する番号1つに○をつけてください。

[ 4 : そう思う 3 : どちらかというと思う 2 : どちらかというと思わない 1 : 思わない ]

## 【自己評価】

1. 私は、実習目的・目標を十分に理解し、自己の目的を明確にして実習に臨んだ ..... 4 3 2 1
2. 私は、必要な事前学習を行って実習に臨んだ ..... 4 3 2 1
3. 私は、今までの学習内容を活用しながら実習を展開した ..... 4 3 2 1
4. 私は、実習中に生じた疑問や課題に対して、自ら調べるなどの自主的な学習行動をとった ..... 4 3 2 1
5. 私は、必要なアドバイスや意見を積極的に求め、学習に活用した ..... 4 3 2 1
6. 私は、自分の考えを深めるために積極的に発言したり、他者の意見を聞く場として、カンファレンスを活用した ..... 4 3 2 1
7. 私は、日々の行動を振り返りながら、それを生かして実習に取り組んだ ..... 4 3 2 1
8. 私は、学習を深めるために、学生同士で協力し合うことができた ..... 4 3 2 1
9. 私は、援助的人間関係を築けるよう実習に取り組んだ ..... 4 3 2 1
10. 私は、実習要項に示された看護学生としてふさわしい行動がとれた ..... 4 3 2 1

## 【授業の内容】

11. 実習の目的・目標・評価方法は、明確に示されていた ..... 4 3 2 1
12. オリエンテーションの内容は、実習の動機付けの機会になった ..... 4 3 2 1
13. 実習目標を達成するために、実習場所・対象者の選択が適切になされていた ..... 4 3 2 1
14. 実習中の課題の内容・量・与えられた期間は適切であった ..... 4 3 2 1
15. 実習全体の振り返りを行い、体験の意味づけ、課題の確認を行う機会が設定されていた ..... 4 3 2 1
16. 学習環境が適切であった（カンファレンスルームの確保・図書・物品など） ..... 4 3 2 1

## 【授業の方法】

17. 教員は、実習の目的・目標に沿って、学生自身の課題が達成できるように指導・助言を行っていた ..... 4 3 2 1
18. 教員は、学生の気付きや体験をもとに、実習における学びが深められるよう、指導・助言を行っていた ..... 4 3 2 1
19. 教員は、学生が困った時に指導・助言を行っていた ..... 4 3 2 1
20. 教員は、学生の意見を認めた上で、指導・助言を行っていた ..... 4 3 2 1
21. 教員の指導は、具体的でわかりやすかった ..... 4 3 2 1
22. 教員は、学生の個性に合わせて指導していた ..... 4 3 2 1
23. 教員は、どの学生にも学習の機会が平等に与えられるように接していた ..... 4 3 2 1

〔次へ続く〕

24. 教員や臨地実習指導者の連携がよくとれていた……………	4	3	2	1
25. 教員は提出した記録物を用いて指導・説明をしていた……………	4	3	2	1

**\* 臨地実習指導者とは、学生指導を行った看護師・保健師・助産師等です。指導者だけではなくスタッフも含まれます。**

26. 臨地実習指導者は、実習目的に沿った指導を行っていた……………	4	3	2	1
27. 臨地実習指導者は、実習の目的・目標の達成のために、活用できる資源などの情報を提供していた……………	4	3	2	1
28. 臨地実習指導者は、学生の行動計画が対象にとって適切かどうかについて具体的に助言した……………	4	3	2	1
29. 臨地実習指導者は、学生が安全かつ確実に看護行為を行えるように、具体的に助言し援助した……………	4	3	2	1
30. 臨地実習指導者は、学生が自由に発言し行動しやすい環境を整えた……………	4	3	2	1
31. 臨地実習指導者は、学生の意見を認めた上で、指導・助言を行っていた……………	4	3	2	1
32. 臨地実習指導者は、学生の質問にわかりやすく答えていた……………	4	3	2	1
33. 臨地実習指導者は、看護実践上のモデルとなった……………	4	3	2	1

### 【全体評価】

34. 私は、実習の目標を達成することができた……………	4	3	2	1
35. 私は、実習を通して、看護学への興味・学習への意欲が高まった……………	4	3	2	1
36. 私は、実習を通して、自己洞察を深め、自身の課題を確認できた……………	4	3	2	1
37. 私は、総合的に判断してこの実習に満足した……………	4	3	2	1

### ★ 自由記載欄

※複数の教員が実習指導に関わった場合、( ) 欄に教員の氏名を記入の上、記載してください。また、臨地実習指導者については、“看護師”“保健師”“助産師”など職種で記載してください。

1. 自分自身の取り組みについて

2. 実習全体を通して効果的だった点について

1) 教員

氏名 ( )

2) 臨地実習指導者

職種 ( )

3. 教員や臨地実習指導者に改善してもらいたい点について

1) 教員

氏名 ( )

2) 臨地実習指導者

職種 ( )

4. その他

## 授業評価アンケート 【実習用】

授業科目名 ( ) アンケート実施日 年 月 日  
 担当教員名 ( )  
 実習施設 ( ) 実習病棟 ( )

このアンケートは、科目担当教員が、今後の授業改善に役立てることを目的として行なうものです。

授業は、学生と教員との相互作用により成立しています。今後の授業を、学生と教員が協働して改善していくために、率直な意見をお聞かせください。なお、アンケートは無記名であり、学生の個人情報は守られます。また、回答の結果が個人の成績評価に影響するようなことは決してありません。

以下の質問項目に対し、1～4までの該当する番号1つに○をつけてください。

[ 4 : そう思う 3 : どちらかというと思う 2 : どちらかというと思わない 1 : 思わない ]

## 【自己評価】

1. 私は、実習目的・目標を十分に理解し、自己の目的を明確にして実習に臨んだ ..... 4 3 2 1
2. 私は、必要な事前学習を行って実習に臨んだ ..... 4 3 2 1
3. 私は、今までの学習内容を活用しながら実習を展開した ..... 4 3 2 1
4. 私は、実習中に生じた疑問や課題に対して、自ら調べるなどの自主的な学習行動をとった ..... 4 3 2 1
5. 私は、必要なアドバイスや意見を積極的に求め、学習に活用した ..... 4 3 2 1
6. 私は、自分の考えを深めるためにカンファレンスを活用した ..... 4 3 2 1
7. カンファレンスでは自由に発言できた ..... 4 3 2 1
8. 私は、日々の行動を振り返りながら、それを生かして実習に取り組んだ ..... 4 3 2 1
9. 私は、援助的人間関係を築けるよう実習に取り組んだ ..... 4 3 2 1
10. 私は、看護学生としてふさわしい行動がとれた ..... 4 3 2 1

## 【授業の内容】

11. 実習の目的・目標は、明確に示されていた ..... 4 3 2 1
12. 実習の評価方法は、明確に示されていた ..... 4 3 2 1
13. オリエンテーションの内容は、実習に向けての学習を計画する動機付けになった ..... 4 3 2 1
14. 実習目標を達成するために、実習場所の選択が適切になされていた ..... 4 3 2 1
15. 実習目標を達成するために、対象者の選択が適切になされていた ..... 4 3 2 1
16. 実習中の課題の量は適切であった ..... 4 3 2 1
17. 実習中の課題の内容は適切であった ..... 4 3 2 1
18. 実習中の課題に与えられた期間は適切であった ..... 4 3 2 1
19. 実習全体の振り返りを行い、体験の意味づけ、課題の確認を行う機会が設定されていた ..... 4 3 2 1
20. 学習環境が適切であった（カンファレンスルームの確保・図書・物品など） ..... 4 3 2 1

## 【授業の方法】

21. 教員は、学生自身が自己の課題を見出し、その達成に向けて取り組めるよう支援した ..... 4 3 2 1
22. 教員は、学生の気付きや体験を、既存の理論や概念に結びつくよう助言した ..... 4 3 2 1
23. 教員は、学生が支援を求めた時に適切な指導を行った ..... 4 3 2 1
24. 教員は、学生の意見を認めた上で、指導・助言を行っていた ..... 4 3 2 1
25. 教員は提出した記録物を用いて指導・説明をしていた ..... 4 3 2 1

[次へ続く]

26. 教員は臨地実習指導者とよく連携がとれていた…………… 4 3 2 1

**臨地実習指導者とは、学生指導を行った看護師・保健師・助産師等です。指導者だけではなくスタッフも含まれます。**

27. 臨地実習指導者は、実習目的に沿った指導を行っていた…………… 4 3 2 1

28. 臨地実習指導者は、学生の行動計画が対象にとって適切かどうかについて具体的に助言した…………… 4 3 2 1

29. 臨地実習指導者は、学生が安全かつ確実に看護行為を行えるように、具体的に助言し援助した…………… 4 3 2 1

30. 臨地実習指導者は、学生が自由に発言し行動しやすい環境を整えた…………… 4 3 2 1

31. 臨地実習指導者は、学生の質問にわかりやすく答えていた…………… 4 3 2 1

32. 臨地実習指導者は、看護実践上のモデルとなった…………… 4 3 2 1

### 【全体評価】

33. 私は、実習を通して、看護学への興味・学習への意欲が高まった…………… 4 3 2 1

34. 私は、実習を通して、自己洞察を深め、自身の課題を確認できた…………… 4 3 2 1

35. 私は、総合的に判断してこの実習に満足した…………… 4 3 2 1

### ★ 自由記載欄

※複数の教員が実習指導に関わった場合、( ) 欄に教員の氏名を記入の上、記載してください。また、臨地実習指導者については、“看護師”“保健師”“助産師”など職種で記載してください。

1. 自分自身の取り組みについて

2. 実習全体を通して効果的だった点について

1) 教員

氏名 ( )

2) 臨地実習指導者

職種 ( )

3. 教員や臨地実習指導者に改善してもらいたい点について

1) 教員

氏名 ( )

2) 臨地実習指導者

職種 ( )

4. その他

## 「授業についてのアンケート」パソコン入力システムに関する調査（学生用）

これまでの「授業についてのアンケート調査」を、パソコン画面で入力するシステムを開発中です。将来的には、授業についてのアンケート調査をパソコン操作で行う方向で検討しています。システム化により、皆さんの意見を、タイムリーに授業改善に活かし、また、学生と教員との意見交換、質疑応答など、双方向のやりとりができることを目指しています。

今回、アンケートの入力作業を行なってみて、以下の項目に関するご意見をお聞かせください。

なお、本システムは、誰の回答であるかを特定することはできない仕組みになっており、匿名性は確保されています。

より使いやすく、有効なシステム作成のために、ぜひご意見をお願いします。

## 1. 入力作業に関する質問

- ・入力にかかる時間はどのくらいでしたか。
  
- ・パソコン上の操作方法はわかりやすいですか。わかりにくい部分は、具体的に記述してください。
  
- ・その他、入力作業をする上で、困った点、不自由な点があれば、具体的に記述してください。

## 2. 画面の表示に関する質問

- ・文字の大きさやレイアウトは見やすいですか。わかりにくい部分は、具体的に記述してください。
  
- ・自由記載欄の入力可能文字数は適切ですか。

## 3. その他、システム化に関することで、質問や意見などあれば自由に記述してください。

ご協力ありがとうございました。

日本赤十字九州国際看護大学:本田多美枝、松尾和枝(基礎)、濱田維子、阿部オリエ